

学校法人 佐藤栄学園

令和 7 年度 栄東中学校入学試験問題

東大特待 I (1月12日) 〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
------------	--

氏 名	
-----	--

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で 26 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」も 1 字として数えるものとします。

一

次の（ 1 ）（ 8 ）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・ 余計なことを言つて（ 1 ）を買う。
- ・ 秋だというのに（ 2 ）を思わせる日差しの強さだ。
- ・ その言葉には（ 3 ）する価値がある。
- ・ 将来を見すえた（ 4 ）な計画を立てる。
- ・ （ 5 ）を見るために浅草の寄席^{よせ}へ行つた。
- ・ この本の著作権は、出版社に（ 6 ）します。
- ・ 気に入つたフレーズを（ 7 ）する。
- ・ （ 8 ）にばかりこだわるのはいいことではない。

【語群】

エンダイ	セイカ	マツセツ	イツコウ
エンゲイ	キゾク	フキヨウ	タヨウ

二

次の（ 1 ）～（ 10 ）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・ 新たな事業を始めて、なんとか（ 1 ）を見出す。
- ・ お金と名誉のどちらを選ぶべきか（ 2 ）にかける。
- ・ 投打に活躍する彼の姿は（ 3 ）をうならせるものだ。
- ・ 資源開発の（ 4 ）を担う重要なプロジェクトとなる。
- ・ この問題が解けなくては教師としての（ 5 ）に関わる。
- ・ 今にも壊れそうな吊り橋を（ 6 ）を踏む思いで渡る。
- ・ 彼のこれまでの悪事を数え上げると（ 7 ）に余る。
- ・ （ 8 ）など加えるつもりもなく、厳しく接する。
- ・ そろそろ（ 9 ）を現して恥をかくに違いない。
- ・ 会社の経営再建のために（ 10 ）をふるう。

【語群】

ア	手心	イ	薄氷	ウ	一翼	エ	天びん	オ	おあなた
カ	十指	キ	活路	ク	馬脚	ケ	こけん	コ	大向こう

三 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

動物行動学の視点からは、音楽という、少なくともヒトの行為の正体を考えるとき、やはり、次のような問いを発することになる。

「発声や、何かを叩いたり吹いたりして音楽を生み出すこと、また、そうやって生み出された音楽を鑑賞することは、ホモサピエンスの生存・繁殖にとってどんな A があるのか」

現在、この問いに対して最もよく知られている、そして説得力のある説は、イギリスの人類学者であり進化心理学者でもあるロビン・ダンバーが提唱する次のような内容である。

ホモサピエンス¹は森の外側に広がる草原や疎林^{そりん}といった、捕食獣などの危険に満ちた地域を主要な活動場所として、そのような環境に適応して生きてきた霊長類^{*2}である。

そんなホモサピエンスにとって非常に重要であり、ホモサピエンスの繁栄^{はんえい}を支える力になった特性の一つは、何と言っても、「群れ内の個体間の協力」である。

ダンバーは、多くの霊長類^{*3}の脳皮質の解剖学的特性とそれぞれの種がつくる群れの規模を比較し、ホモサピエンスの、個体同士が互いに知り合い、関係を維持できる上限の群れの人数を約一五〇と考えた。群れが維持されるためには、脳皮質内の神経ネットワークが発達し、他個体の識別や記憶が可能でなければならないというわけだ。そのうえでダンバーはこの一五〇人が具体的に、どのようにして相互の繋がり^{つな}を保ってきたか様々な角度から考察した。

(中略)

大抵^{たいてい}の霊長類では、群れ内の個体同士の繋がり^{つな}は、主に毛づくろいによって維持されていると考えられているが、一五〇個体となると、直接、体に触れる毛づくろいでは、あまりにも時間とエネルギーが割かれ、各個体の生存・繁殖に負の影響^{えいきょう}を与えることにな

る。
①、ダンバーが考えた「群れ内の個体同士の繋がりを保つ方法が、「皆でそろって音楽」を表出し、その音楽に合わせて、そろって発声したり踊ったりすることである。生理学的な研究では、われわれは、リズムに合わせて発声したり踊ったりするとき、脳内では、エンドルフィンなどの「快」を感じさせる物質が放出され、それが集団で行われると、個々人のエンドルフィンの放出量はさらに増大することも知られている。

ダンバーは、音楽は、ホモサピエンスそれぞれの個体の生存・繁殖に有利な約一五〇人の集団を、互いに顔見知り状態を維持する働きを担って生まれた②、現代の脳内分析によって明らかになっている、音楽のリズムや高低や和音を認識する神経回路が遺伝子の変異によって生まれた③のではないかと推察したのだ。

読者の皆さんも、音楽のリズムに合わせて体を動かすときの快さを感じることがあるのではないだろうか。そして、他の多くの人と一緒にいったときの大きな快さを感じた方もおられるかもしれない。

ここでは長くなるので述べないが、この説は、われわれホモサピエンスに関する他のさまざまな特性にも考慮されたとても説得力のある内容である。③、この説を聞いたとき私には一つ、素朴な疑問が残る、それがずっと気になっていた。その疑問

というのは「リズムを感じたり、それに合わせて踊ったりしたとき、なぜ、快感化学物質エンドルフィンが放出されるのか」というものだ。

さて、その私を感じた疑問にも関連して、ここから、さらに重要な内容になるので、よく聞いていただきたい。

なぜ「さらに重要」になるのか？……それは、ここから私の仮説が述べられるからだ。

私は、拙著「ヒトはなぜ拍手をするのか」(新潮社)の中で、「なぜヒトには、リズム感があるのか？」と題して次のように推察した。

ヒトも他の動物も、外界の空間や時間の状態を把握しておくことは、生存・繁殖にとって非常に大切なことである。④食料がある場所や捕食者が潜んでいる可能性が高い場所、前方から走ってくる捕食したい動物が自分の前を通り過ぎるタイミングを把握し予測することなどを想像してみればよい。

外界の空間や時間の状態の把握についてヒトの脳が採用している戦略の一つは、空間についても時間についても、ある長さの単

位³を想定し、知りたい対象の長さを、その「単位」の何倍かを脳内で分析して、割り出す、というものである。

リズムとは、その「単位」を想定し、その何倍かを分析する過程、ととらえることができる。

時間のリズムの場合、現代の生活の中では、次のような一場面を想像してみたい。

車が行き交う道路の、信号機がないところを、あなたは、道路の向こう側へと横断しようとしている。そんなとき、あなたは、脳の中でリズムを刻みながら、行き交う車の動きを把握し、リズムのどのタイミングで飛びだすかを決めている。そう思わないだろうか。「一（いち）、二（に）、三（さん）」っと。

それに呼応して、自分自身の体の各部（脚、腕、頭部……など）の動きのタイミングを合わせるときにもリズムを使う。「一（いち）、二（に）、三（さん）」っと。

このように、リズムは時間、空間を把握するときの単位なのであるが、対象自体がリズムをもっている場合には、なおさら把握しやすい。

ちなみに、われわれが外界の物事現象を把握するとき、それを当てはめて、その助けを借りて対象の把握を試みるものは「リズム」だけではない。「バランス」もそうだし「対称性」もそうだ。そして「因果関係」も。

このようにして対象が上手く把握できたとき「快」を感じるのは、対象把握の成功が生存・繁殖に有利になるからだ。生存・繁殖に有利になることを達成したとき（喉が渴いた時の飲水、組織の中での昇進……）脳内にはエンドルフィンが出され「快」を感じ、その行いのさらなる継続を促されるのだ（そういった脳の神経構造を有している個体が、進化の産物として生き残っている）。そして、その「快」が「美しさ」の正体だ。

外界の、一見、複雑で把握が難解に思える大規模な対象の背後に、その把握を大いに助ける原理、法則を見出したとき、ヒトは「美しい」と感じ「快」を感じる。たとえば、「世界一美しい数式」の代表であるアインシュタインの「 $E=mc^2$ 」（質量mの物質は、mにcの光速の二乗を掛け合わせたエネルギーと等しい）がそれだ。

われわれの脳は、把握に大成功した対象に、そして、成功した対象の助けになった「物差し」に対して「美しさ」と「快」を感じるようにプログラムされていると言ってもいいだろう。繰り返しになるが、そのほうが、外界把握は向上し、生存・繁殖の成功度も

向上するのだ。

和音は、音程の低いほうからA、B、Cとすると、A B間の波長の差の値とB C間の波長の差の値が同じだから把握しやすい。美しいメロディーは、音の変化の仕方に B があり、把握しやすく記憶にも残りやすい。だから快を感じる。

少しくどくなるが、このようにして把握に大成功した対象が、把握の成功以外の、さらなる生存・繁殖の有利さに結び付く情報であった場合、快の程度は増すと考えられる。たとえば、左右が、より対称である（ヒトの）顔は、（ヒトから見ても）より美しいと感じられることが学術的な実験によつて明らかにされているが、それが、もし、男性にとつて、健康である（つまり子供を安全に、より多く出産し育てる可能性が高い）ことを示す要素を備えている女性の顔であれば、美しさや快を感じる度合いが高いのではないだろうか。

また行動が、ある原理に従つて一貫して行われるとき、それを見たヒトは、そこに「行為の美」¹⁵と呼ばれるものを感じる。あの人物の行動には一貫性がある、行為の根底に信念がある、というわけだ。そして、その行為が他人を助けるものであれば、その「他人」が自分である可能性もあるわけであり、つまり、自分が助けられる可能性もあるわけで、「行為の美」の度合いはより増すのである。

（中略）

では、ここまでお話した上で、改めて、ご質問があつた「ヒトにとつて音楽は何でしょう？」に向き合つてみたい。

ヒトにとつての音楽の正体は、「外界認知のための物差しとして、それがうまく働いたときは快を感じさせ、それを基盤に、個々のホモサピエンスが有利になる、約一五〇人の集団を、互いに「顔見知り」状態で維持するもの」というのが、ここまで述べてきた話である。

以下では、この一つの「正体」以外に、動物行動学の視点から考えられる、いくつかの付随的な「正体」についてお話をしたい。

音は外界について様々な情報を脳に与えることができる。脳はそうように進化している。例えば、それが見えていなくても、音程の低い「ドンッ」という音がすれば、その音の細かい特性も加味して「大きくて重いものが、他の大きな、あまり硬くはないものに当

たった」と推察する。ガサガサとかゴーといった低い音がだんだん大きくなってくると「物体が周囲の物を蹴散らしながら自分に近づいてきている」と推察する。「カンカンカンカン」という音が続き、音と音の間隔がだんだん短く音量も小さくなり、やがて音が止んだら、「硬いものの上で硬いものがバウンドしながら移動し、やがて動かなくなった」と推察する。

同種（ヒト）の声についても、「キヤーツ」という、高くて大きな声が聞こえたら、「誰かが危険を感じる事態が発生した」と推察する。小さく低音の音が、更にだんだんと音程を下げながらゆっくりと変化していったら「当人が沈んだ気持ちになっている」と推察する。

これらの推察が、事態の状況をどれほど正確に言い当てているかわからないが、少なくとも音がなるときよりずっと真実に近い推察を可能にし、それを聞いて自分がどう行動したら、自分の生存・繁殖に有利になるかについての有益な情報になる。

音楽は、こういった、音の状態を分析して推察する脳内回路（生後、間もない赤ん坊でも、低い音がだんだん大きくなってくのを聞いたり、ヒトの大きな怒鳴り声を聞いたりすると泣き出す場合があることも知られている）を、逆手に取って他個体をうまく動かし、曲の中で、音の変化によって大きな物体の接近を感じさせ恐怖心を沸き立たせたり、優位者の威厳を効果的に演出したり、異性に特有な音刺激で相手の心を揺さぶったり、さまざまな喜怒哀楽の感情を喚起して聞く側の心理を操ったりすることができる。

（小林朋道『モフモフはなぜ可愛いのか 動物行動学でヒトを解き明かす』より）

- * 1 ホモサピエンス……………人類の進化の最終形態。文中の「ヒト」と同義。
- * 2 霊長類……………は乳類の一種。サルの仲間。ホモサピエンスもこれに含まれる。
- * 3 大脳皮質……………大脳の表面部分。思考や言語など高度な機能をつかさどる。
- * 4 エンドルフィン……………動物の脳内で生成される物質。快楽を感じさせ、苦痛を和らげたり幸福感を増幅させたりする。
- * 5 アインシュタイン……………ドイツ生まれの物理学者。

問一 本文中の A に入れるのに最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 歴史 イ 利益 ウ 根拠 こんきょ エ 問題 オ 規律

問二 — 線部1「ホモサピエンス」が「危険に満ちた地域」を生き延びられた要因は何ですか。本文中から十字でぬき出して答えなさい。

問三 本文中の ① ④ に入れるのに最も適切な接続語の組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア	①	そこで	②	つまり	③	ただし	④	たとえば
イ	①	だから	②	たとえば	③	そして	④	あるいは
ウ	①	しかし	②	なぜなら	③	けれども	④	たとえば
エ	①	そこで	②	たとえば	③	ただし	④	なぜなら
オ	①	しかし	②	つまり	③	しかも	④	なぜなら

問四 — 線部2「この説」の内容を三十字以上四十字以内で答えなさい。

問五 — 線部3「リズム」とありますが、本文中で述べられているような形で「リズム」を用いている例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 仲間内であらかじめ合言葉を決めておき、その正誤次第で相手が味方が敵か見分ける。
イ 目覚まし時計をセットした時間より早くに目を覚まし、時計が鳴らないようスイッチを切る。
ウ 単調なしゃべり方をする先生の話の話を聞いているうちに、うっかり眠^{ねむ}ってしまう。
エ 二人で重い荷物を持ち上げるとき、息をそろえるためかけ声とともに一気に力を入れる。
オ 走行中の車のタイヤが突然大きな音を立てたことで、パンクしてしまったことに気づく。

問六 — 線部4「バランス」とありますが、我々が外界を把握するときに「バランス」を用いている例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 部屋で育てていた鉢植^{はちう}えに水をやるのをうっかり忘れていて、枯^からせてしまった。
イ 体操競技で型通りのポーズをとり、制限時間いっぱいそのままの体勢で耐^たえた。
ウ ある製品の人気が高まり在庫が少なくなったので、すぐに生産量を増やして対応した。
エ 徹夜^{てつや}で仕事をした翌日は、疲れ^{つか}がたまっていたせいでいつもより長く長く眠^{ねむ}ってしまった。
オ 家のブレーカーの容量を上回る電気を一度に使ったせいで、停電が発生した。

問七 本文中の B に入れるのに最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 風情^{ふぜい} イ 不足 ウ 秩序^{ちつじょ} エ 余裕^{よゆう} オ 義務

問八 — 線部5「行為の美」とありますが、その具体例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 容姿だけでなく、ことばづかいや立ち居振る舞いが美しい人を相手に選んで結婚する。

イ 目の前で道に迷っている人に気まぐれで声をかけ、目的地まで道案内をしてやる。

ウ 記念日の祝賀パレードで、団員全員が一糸乱れぬ美しい動きを見せる。

エ 常日頃から地域の美化活動に積極的に参加し、災害時には復興支援に加わる。

オ 自分が好きな人には愛想よく接するが、嫌いな人には冷たい態度をとる。

問九 次の文は、——線部「リズムを感じたり、それに合わせて踊ったりしたとき、なぜ、快感化学物質エンドルフィンが放出されるのか」に対する筆者の説明をまとめたものです。説明文中の X・Y に入る表現を、本文の内容をふまえてそれぞれ指定字数で答えなさい。

リズムは外界の空間・時間の状態を把握するための単位の一つであり、ヒトの脳は、X…二十字以内ときに「快」を感じさせ、Y…十五字以内性質があるから。

問十 — 線部 6 「付随的な『正体』」について、次の (1)、(2) の問いに答えなさい。

(1) その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽は、簡単な音の組み合わせで他者を怖^{こわ}がらせ、強制的に服従させることができてしまう危険なものである。
- イ 音楽は、ヒトの脳のはたらきを利用して、自分に都合が良いように他者を誘導^{ゆうどう}する手段となるものである。
- ウ 音楽は、ヒトの脳を混乱させて正常な判断力をなくし、最終的には集団を崩壊^{ほうかい}させてしまうものである。
- エ 音楽は、ヒトの快を感じる性質を利用して、異なる群れ同士の連携^{れんけい}を強めることに役立つものである。
- オ 音楽は、簡単な音の組み合わせで他者を感動させ、楽しませることができ、最も手軽な娯楽^{ごらく}である。

(2) (1) の性質について、本文で述べられていない例にはどのようなものがありますか。一つ挙げて説明しなさい。

四 次の文章は、青山美智子「秦斗の頭」（『リカバリ・カバヒコ』所収）の一節です。高校に入学し新たな生活をスタートさせた

「僕（おれ）（秦斗）」でしたが、うまくはじめずさえない日々を送っていました。ある日、近所の公園を訪れるとそこにクラスメイトである「雫田さん」がいて、二人は勉強や漫画の話題で盛り上がりつつ親しくなり、「僕」が漫画を貸す約束をしてその日は別れました。本文はその続きの部分です。なお、本文に登場する「カバヒコ」は、この公園に置かれている遊具のカバで、この地域では「体の治したい部分と同じところを触ると回復する」という御利益があるとされている存在です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

翌日、まず二限目の数学で答案用紙の返却があった。46点。平均点は52点。

僕にはもう、驚きすらなかった。劣等生の が目の前に突き付けられる。

五限目では地理が戻ってきた。答案用紙に書かれているのは、57点。

「平均点は64点」

矢代先生が言った。

よかった、数学も地理も、とりあえず赤点はまぬがれたらしい。

ほっとする一方で、赤点を基準に一喜一憂している自分に苦笑した。

落ちぶれたもんだな、宮原秦斗。

「ちよっと出題量が多かったからな。でも、大学入試はこんなもんじゃないから練習だと思って」

大学入試に向けての練習。

そう言われて、あらためてそうだったんだなと思う。疑問にも感じなかった。

僕は今まで、高校入試に向けて勉強してきて、今度は大学入試に向かっていているらしい。

大学に入りたいのかどうかも、よくわからなくなってきた。なんで勉強するんだ？

矢代先生がチョークを取り、背を向ける。

1位から3位までの点数だけ、黒板に書かれていく。

1位 97点

2位 96点

3位 88点

名前は公表されない。3位までの本人だけが自分のことだと知るのだ。僕たちにわかるのはただ、そんなすごいヤツがこのクラスにいるってことだけ。

中学時代の僕は、あっち側にいたのに。

でももう、仕方がない。僕は不相応な苦しい「狭い世界」を選んでしまったのだ。^{せま}

これから僕は、この立ち位置で過ごしていこう。赤点を取らない程度に、落第しない程度に。

そう思ったら、気持ちが少し楽になった。

バイトでもしようかな。雫田^{しずんだ}さん、お好み焼き店楽しいって言ってたし、コンビニやハンバーガーショップとかでもよく募集^{ほしゅう}しているし。

もつとこう、高校生活をエンジョイするっていうのも、いいんじゃないかな。

勉強ができるだけがすべてじゃないんじゃないかな。

²雫田さんみたいな友達がいれば、けっこう楽しく過ごせるかもしれないし、落ちこぼれなら落ちこぼれなりの、のんきな学校生活っていうのも、ありなのかな。

ぼんやりした頭に、矢代先生の声^{こゑ}が響く。答案用紙返却の日の授業はどの教科も、答え合わせの時間だ。

先生に言われるまま、青いボールペンで正解を書いていく。間違^{まちが}えた答えの余白に、そして、書き込^かむことさえできなかった空欄^{くうらん}に。

授業の終わりがけに、雫田さんが教卓きょうたくに向かった。

矢代先生と、何か小声で話している。

「正直なヤツだな」

矢代先生が笑い、赤ペンで何か書き記す。

そして黒板に向き直ると、黒板消しとチョークを使って訂正ていせいをした。

1位 96点

2位 95点

3位 88点

えっ、と声をもらしそうになった。

雫田さんはすました顔で席に戻っていく。手には答案用紙を持っていた。

すぐにわかった。

つまり、2点分のどこかが間違っているのに丸になってしまっていて、それを彼女かのじょは正直に申告しんこくしたのだ。97点から95点へ。僕だけでなく、このクラスの全生徒が理解しただろう。

期末テストにおける地理のクラス2位が、雫田さんだったこと。

放課後、雫田さんが僕の席までやってきた。

「ブラマン、持ってきてくれた？」

屈託くつたくのない、明るい表情。

僕は、雫田さんを直視することができなかった。

五冊の漫画が入った紙袋かみふくろを渡す。笑えない。あの公園のときみたいに接することができない。

漫画を受け取りながら、雫田さんがちよつと顔を傾ける。

「 1 」

「 2 」

僕は苦笑いをしながら言った。

「 3 」

ぽかんとしている雫田さんに対して、思わず嫌味っぽい言葉が出る。

「 4 」

「 5 」

さつくりと言われて、むらつと怒りが湧いた。

勉強できるくせに、できないふりしてたんだろ？ 僕のことバカにしたのかよ。

いるよな、そういうヤツ。さも遊んでるふうに見せかけて、相手を油断させて、ちゃっかりいい成績取って。おまけに誠実さもアピールしちゃって。

抑えきれず、つかかるような口調になってしまう。

「 6 」

「 7 」

雫田さんは事もなげに言った。

「苦手だから、めっちゃめっちゃ、めっちゃ勉強したんだよ」

雫田さんの目が、僕を射る。そして彼女はこう続けた。

「誰かに勝ちたかったんじゃないかって、私が、がんばりたかったんだ」
はっと、胸を打たれた。

僕は言葉をなくし、雫田さんを見る。

雫田さんはちらつと目を泳がせ、僕の返事も待たずに「じゃあね」と足早に去ってしまった。打たれたままの胸はじりじりと鈍く痛み、僕はしばらくぼんやりと突っ立っていた。

公園へ向かう足取りは重かった。

今の僕に、愚痴を聞いてくれるような人はいない。せめてカバヒコのほのぼのした姿に触れたかった。どうかまた頭のいい自分に戻してくれと願を掛けたかった。

会話を続けようとせず、さつさと帰ってしまった雫田さんの後ろ姿が脳裏に焼き付いて離れない。

彼女はもう、僕と話す気もないってことなんだろう。あんないやな言い方をしてしまったから当然だ。

でも、だって、こんなことって。

釈然としないうまま歩いていたら、汗がにじみ出てきた。七月も半ばに入って、今日は特に蒸し暑い。

喉が渴いた。ちょうどサンライズ・クリーニングの底が見えてきて、僕は自動販売機の前に立つ。

コイン投入穴に百円玉を二枚入れ、カルピスウォーターのボタンを押した。がたんと音がしてペットボトルが受け取り口に落ちてくる。同時に、お釣りが落ちる小気味いい音も軽く響いた。

「……あれ」

カルピスウォーターは百五十円だ。なのに、お釣りを取ろうと返却口に指を入れたら硬貨が二枚あたった。

ふたつの五十円玉。

前の人が取り忘れていっちゃったんだ。僕はその二枚を手のひらに載せる。

ラッキー。

そのまま財布に収めてしまえば、誰も気づかない。五十円ぐらいじゃ別に、忘れていった落とし主も困ったり傷ついたりしないだろう。

財布を開けようとして、ふと、雫田さんのことを思い出した。

97点から95点への自己申告。

言わなければ、絶対わからなかったはずなのに。

1位のままでいられたのに。

——誰かに勝ちたかったんじゃないなくて、私が、がんばりたかったんだ。

「かなわないよなあ……」

僕は五十円玉をひとつだけ財布に入れ、もうひとつは手のひらに収めた。

空いているほうの手でカルピスウォーターを持ち、ごくごく飲む。そしてちよつと考えたあと、ガラス張りのドア越しにサンライズ・クリーニングをのぞいた。

ビニールにくるまれた衣服たちにうずもれるようにして、カウンターの向こうにおばあちゃんがひとり、座^{すわ}っていた。銀のかかったような白髪^{しろが}で、気持ちいいくらいさっぱりしたショートヘアだった。雫田さんの言ってた、カバヒコの腰^{こし}をなでたらヘルニアが治ったおばあちゃんかもしれない。

僕はドアを開けた。おばあちゃんがふいと顔を上げる。

「すみません。その自動販売機、前の人のお釣りが残ってたみたいで」

そう言つて五十円玉を差し出すと、おばあちゃんは「へえっ！」とすっとんきような声を上げた。

そして僕のことを頭のでっぺんから足先までじろじろとねめまわし、五十円玉を受け取るところ言つた。

「美冬^{みふゆ}ちゃんと同じ学校の子？」

「え」

「雫田美冬ちゃん」

おばあちゃんは自分の襟元^{えりもと}のあたりにとんとんと指を当てた。僕のシャツについている校章を指しているのだろう。

「あ、ええ。まあ」

「雫田一家は昔からうちの常連さんだから。美冬ちゃん、いい子だよね」

「……………そうですね」

「バイト、忙^{いそが}しくしてるんだろ？」

「そうだと思います」

話が長くなりそうだ。適当に聞き流して店を出ようとしたら、おばあちゃんが五十円玉を引き出しにしまいながら言った。

「あの子、兄弟姉妹^{しまい}、合わせて六人いるんだよ」

六人？

思わず目を見開いた。そんなに大家族なのか。

「高校にかかるお金はできるだけ自分で稼^{かせ}ぐって言ってき、えらいもんだよね。そのせいで成績悪いって言われたくないからって、勉強も必死でね。あの狭い団地でひとり部屋もないのに、よくやってるよ」

殴^{なぐ}られたような気分だった。

なんだよ、それ。できすぎだろ……。

いろんな気持ちが混ざり合って、ぐちゃぐちゃになる。雪田さんへの敬意と嫉妬^{しと}。自分への苛^{いら}立ちと保身。

店のドアが開き、大きな紙袋を提^さげた女の人が入ってきた。三つ編みを一本に束ねているその人に「いらっしやい」とおばあちゃんが声を上げた。お客さんだ。

僕は黙^{だま}って店を出る。

「頭脳修復」なんて、軽々しくカバヒコにお願いする気持ちになれなかった。僕はそのまま来た道を戻り、公園に行かず家に帰った。

家のドアを開けると誰もいなくて、僕は黙って靴^{くつ}を脱^ぬいだ。

ダイニングテーブルの上にメモ書きがある。

カレー、あたたためて食べてね。冷蔵庫にサラダがあります。

そうだ、母さんは今日、友達と観劇に行っているんだった。

僕は大きく息をついた。

とりあえず今日のところは、母さんとテストの話をしないですむ。

僕は部屋着に着替えると、スマホアプリのバトルゲームに没頭した。戦って戦って戦って、敵を倒して、点数を稼いで。「くそっ」とか「なんだよ!」とか小さく叫びながら、夢中で指を動かした。

すっかり夜になっておなががすいてくるとカレーとサラダを食べ、ソファにもたれた。

なんか、疲れちゃったな。楽しいことないかなあ。

目を閉じると急に睡魔が襲ってきた。

まどろみの中で、僕は山奥の少年のことを思った。ただ走りたくて走ってるなら、どれだけ気持ちがいいだろう。僕はいいたい、何がやりたいんだろう。誰か教えてよ。

そしてそのまま吸い込まれるように眠りに入り、目を覚ますと父さんがテーブルについてるのでびっくりした。父さんが帰ってきたことにまったく気がつかず、二時間ほど熟睡していたらしい。

「あ、おかえり」

「おう。よく寝てたな」

気がつけば僕の肩に綿毛布が被さっている。父さんがかけてくれたのだ。

「晩飯はもう、食べたのか?」

「うん。父さんは」

「食べた食べた」

椅子に座っている父さんは、背中を丸めて目を凝らしながら、テーブルの上で手作業をしていた。僕はソファから下りて近づいて

いく。父さんの手元を見ると、鳥やリスやらの形をしたプレートに、細い油性ペンで何か書き込んでいた。

「なに、これ」

「可愛いだろ。百円ショップで見つけたんだ。ガーデニング用のネームプレート」

嬉し^{うれ}そうに父さんは答えた。

百日草。ベゴニア。デユランタ。

プレートに書き込まれているのは植物の名前らしい。どんな花か、僕にはイメージもできないけど。

そのまま自分の部屋に引っ込んでしまうのも気がひけて、僕はテレビのリモコンを手取る。父さんも好きなバラエティがやっていて、僕はソファに戻ってそれを見た。

大御所^{おおごしよ}タレントが司会をしているトーク番組だ。若手の芸人^{いっしょうけんめい}が一生懸命、自分の体験談を語っている。

「うちにパキラっていう観葉植物があるんですけど、僕の言葉がわかるんですよ！ あっち側に伸びろって言うのと、ちゃんとそっちに向かつて枝が伸びるんですよ！ えらいなあ、すごいなあって褒めてやると、なんかもう、葉っぱがツヤツヤしちやって」

司会の大御所タレントが「おまえより賢い^{かしこ}なあ」とツツコミを入れる。それを見て父さんが「はは」と小さく笑った。

僕は訊^{たず}ねた。

「父さんは、こういうことしないの？」

「こういうことって？」

「植物にきれいだねとか褒めてると成長がいいって、よく聞くじゃん。褒めないの？」

暗に、かねてからの疑問を投げたようなところがあった。

父さんはいつも優しい^{やさ}い。でも、褒めてくれることはほとんどない。それがずっと、不思議で不安だった。本当の本当は、冷たい人なのかもしれない。

父さんはちょっとかぶり⁷を振る^ふ。

「父さんはしないよ。そんなこと」

やっぱり。

こんなに可愛がつているように見える植物にさえ、そういう気持ちが起こらないのか。

僕はあたりさわりなく「まあ、花に耳なんてないもんね」と言い、テレビ画面を見た。深追いをして自分が傷つくのもいやだった。

すると父さんはちょっと間を置いて答えた。

「いや、植物に言葉なんかわかるわけないって疑ってるわけじゃなくて、逆なんだ。本当に通じると思うんだよね。だから、言葉には責任がある」

僕はテレビ画面から父さんへと顔を向ける。

父さんは鳥の形のプレートを手に取りながら続けた。

「褒められなくてがんばるって、それも悪いことじゃないんだけどな。それだけを目標にしていると、褒められなかったときにくじけちゃうだろう」

ドキリと胸が鳴った。

今度は父さんが、暗に回答してきたような気がした。⁸

父さんは穏やかに、でも力強く言った。

「ただ褒めてもらえなかったって、それだけのことなのに。誰が何を言ったって、何も言わなかったって、懸命に咲こうとしているその姿には、なんの変わりもないのにさ」

そして僕のほうをしっかりと見て、父さんはほほえむ。

「だから父さんは、ただ愛するんだ。それだけ」

そうして父さんは話すのをやめ、プレートに植物の名を書き込む作業に戻った。⁹
涙ぐみそうになって、僕はソファに置かれたままの綿毛布を握りしめた。

父さんの愛情は、まさにこの物言わぬ綿毛布だった。

問一 本文中の [] にあてはまる言葉を、次の説明を参考にしてひらがな四字で答えなさい。

・ [] とは、焼いて物に押す、鉄などで作った印、またその印のあとのこと。昔、刑罰として罪人のひたいなどに押したりもした。「 [] を押される」という慣用句は、「消し去ることのできない悪い評価を受ける」という意味を表す。

問二 — 線部1「僕は不相応な苦しい『狭い世界』を選んでしまった」とありますが、これは「僕」がどのような状況にあることを表していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 高校生になり様々なことに挑戦して楽しめる環境にある中で、成績で自分の可能性を決めるような考え方に囚われている自分に憤りを感じる状況にあるということ。

イ 高得点者は明かされず、勉強ができるのは誰なのかクラスが疑心暗鬼に陥る中で、過去の栄光にすがりついて自分のプライドを保とうとする状況にあるということ。

ウ テストの結果で高校生活全体の評価がなされるという風潮がある中で、成績が振るわずとも落第しなければいいと自分を納得させて開き直る状況にあるということ。

エ テストの点数いかにその人の価値が定められるという見方に支配される中で、学力が伴わず誰にも認めてもらえない自分をみじめに感じる状況にあるということ。

オ 次は大学へ向けて勉強するのが当然という雰囲気厳然としてある中で、大学へ行くことや勉強することの意味も見出せず、将来を悲観する状況にあるということ。

問三 ― 線部2 「雫田さんみたいな友達がいれば、けっこう楽しく過ごせるかもしれない」とありますが、ここから「僕」は「雫

田さん」をどのような人物として見ていると考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア テストの成績や学校での周りの評価などを気にとめるふうでもなく、将来のことを考えずに毎日を無為に過ごしている人物。
イ 勉強への関心もそう高くなって成績も振るわず、学業よりむしろ自分の好きなことを優先してその時を楽しもうとする人物。
ウ 学業で成功すること以外に、充実した高校生活を送るために本当に大切なものは何なのかを考えて行動する打算的な人物。
エ 勉強でも高校での生活においてもすべてに全力でぶつかりたいと理想を掲げてはいるが、結局は中途半端になっている人物。
オ テストの点数の善し悪しでの立ち位置などではなく、高校生活を満喫できているかどうかでその人を判断するような人物。

問四 ― 線部3 「笑えない。あの公園のときみたいに接することができない」とありますが、このような反応になったのはなぜで

すか。「僕」の心境をふまえて三十字以上四十字以内で答えなさい。

問五 本文中の「1」「7」には次のア～キのいずれかが当てはまります。「4」に当てはまるものとして最も適切
なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ああ、そのこと

イ ……いや

ウ 苦手だよ

エ 頭よかったんだなと思って

オ あれ？ どうした？

カ 95点なんて、すごいじゃん。訂正しないで黙ってれば1位だったのに

キ 地理、めっちゃ苦手って言ってたじゃないか

問六 — 線部5「僕は五十円玉をひとつだけ財布に入れ、もうひとつは手のひらに収めた」とありますが、このようにした理由を

説明したものとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 先生の間違いを見逃すこともせず、自分が不利になろうとも不正を許さない雫田さんに、他人のおつりをだまっただけかすめ取ってしまうような自分の行動を知られてしまったら、絶対に責められて軽蔑されるのではないかと思ったから。

イ 自分の順位が下がるとわかっていてもあえて点数の変更を申し出た雫田さんの行動に衝撃を受け、いまだに心の整理が追いつかない中で不意に幸運が訪れてしまい、この事態をどうしてよいかわからず無難な対応をしようと思ったから。

ウ テストの点数だけでなく、自らの不正を許さずに正直を貫くところからも、雫田さんとの差を見せつけられた印象を受け、何もできない自分が情けなく罪悪感を抱いていたが、これはちやうどよく自分を罰する機会を得たと思ったから。

エ 点数の間違いを申し出れば自分が高得点だとみんなに知らしめるようなものだと分かっていたはずなのに、わざわざそれを行った雫田さんに対して釈然としないものを感じ、沸き起こってきた対抗心から見返してやろうと思ったから。

オ 自分が不利になる申し出を自ら行った雫田さんの姿を通して、他人からどう思われるのではなく、自分自身を認めることができるように行動することが大切だと教えられた気がして、雫田さんにならって行動してみようと思ったから。

問七 — 線部4「どうかまた頭のいい自分に戻ってくれと願を掛けたかった」とありますが、それが — 線部6『「頭脳修復」なんて、軽々しくカバヒコにお願いする気持ちになれなかった」というように心境が変化したのはなぜですか。「僕」の心情をふまえて六十字以上八十字以内で答えなさい。

問八 — 線部7「かぶり」とはからだの一部を表す言葉ですが、その部分とはどこですか。漢字一字で答えなさい。

問九 — 線部8 「今度は父さんが、暗に回答してきた」とありますが、これはどのような投げかけに対するものですか。「僕」が「父」に真に尋ねたかった内容を「〜ということ。」に続くように二十字以上三十字以内で答えなさい。

問十 — 線部9 「涙ぐみそうになって」とありますが、そのようになったのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父との距離を縮めようとして父のやることに興味を示してみたが、自分と言葉を交わす間も父の意識はずっと植物へと向けられていて、息子である自分のことは置き去りにされている印象がぬぐえず、父の愛を期待していた自分にむなしさを覚えたから。

イ 父の植物への接し方を通して、愛情をあえて言葉に表さないのは、思いや期待にしばらくしてしまう相手を思いやってのことであって、そのような愛の示し方もあると教えられたが、自分はそれでも言葉にしてほしいと悔しい思いがこみ上げてきたから。

ウ 努力する姿に対して何も言わずにただ相手を思いやるという父の愛のあり方に感動した一方で、「おまえは一生懸命になれていない」と遠回しに諭された気がして、言葉には表されていないけれど本当は期待されているということが伝わってきたから。

エ 人に秀でて優れた結果を示すことで認められることこそが愛だと思っていたが、父からありのままの存在自体を受け止める愛し方があることを示唆され、思えば父が自分のことをずっとそのように見守ってきてくれたことにあらためて気付かされたから。

オ 今まで父の考え方や思いを理解することに無関心で避けてきたが、無理に言葉にしないことも父の愛情の形であったことがようやく理解でき、父は息子には関心がなく、冷たい心の持ち主なのだと考えていたことは誤りであったとここで思い至ったから。



25T110

解答用紙

（50分）

ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

一

5	1
6	2
7	3
8	4

二

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

三

問十	問九	問五	問四	問一
(2)	(1) Y X	問六		問二
		問七		
		問八		問三

四

問十	問九	問八	問七	問五	問四	問一
				問六		問二
						問三

ということ。